第２章　京都大学病院構内AH19区の発掘調査

浜崎一志　千葉豊　森下章司

１　調査の経過

本調査区は吉田山西南麓，京都大学医学部附属病院構内の東部にあたる（図版1-191）。ここに臨床研究棟および中央診療棟の新営が計画されたため，既存建物を除く予定地全域の発掘調査をおこなった。既存建物を残したままで調査を進めたため，発掘区が不整形になり，便宜上，発掘区を北部，東部，南部，西部として記述する（図６）。

本調査区一帯は，平安時代末に，法勝寺をはじめとする六勝寺の造営を機に展開した白河街区の北部に位置する。また，鳥羽法皇の皇后，高陽院泰子祈願の福勝院（12世紀中葉～13世紀後葉）の比定地に隣接する地にもあたる。このほか，浄土宗最初の律院であった照臨院（18世紀前葉～19世紀）が調査区周辺に比定されている。江戸中期から幕末にかけては，調査区の南の聖護院村に大田垣蓮月，富岡鉄斎，中島棕隠などが集まり住み，文人墨客の集う所としても有名であった。[(1)]

周辺の発掘調査では，1985年度に本調査区の北で実施した154・155地点の調査で古代の土坑，中世の井戸と溝，近世の大規模な土取り穴を検出している（図６）。また，1984年度におこなった南の141地点では近世の池や幕末の土坑を検出している。幕末の土坑からは大田垣蓮月の手による蓮月焼が多量に出土し，蓮月の住居が141地点のすぐ南にあったことを明らかにした〔浜崎・宮本87 pp. 52-55〕。これらの調査の結果から，本調査区でもこうした遺構の検出が予測されていた。

今回の調査では，まとまって出土した多数の縄文土器や，奈良時代の土器と焼土塊をともなう土坑を検出した。前者は付近に縄文集落の存在をうかがわせるものであり，後者は住居跡の可能性がある。中世では建物跡や，多量の土器が投棄された土坑が，また近世では大規模な溝群や，照臨院に関連すると考えられる多量の瓦や陶磁器が出土した。出土した各時代の遺物は整理箱187箱におよび，先史時代から近世にわたる，この地一帯の土地利用の変遷を復原するうえで大きな成果を上げることができた。

なお，縄文時代の遺物に関しては，『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』において，高野川系，白川系の流路があり，複雑な地形環境を形成していた病院構内一帯にも，自然堤防上や微高地上に縄文人の活動が及んでいたことを指摘しており〔千葉91〕，本稿では割愛した。

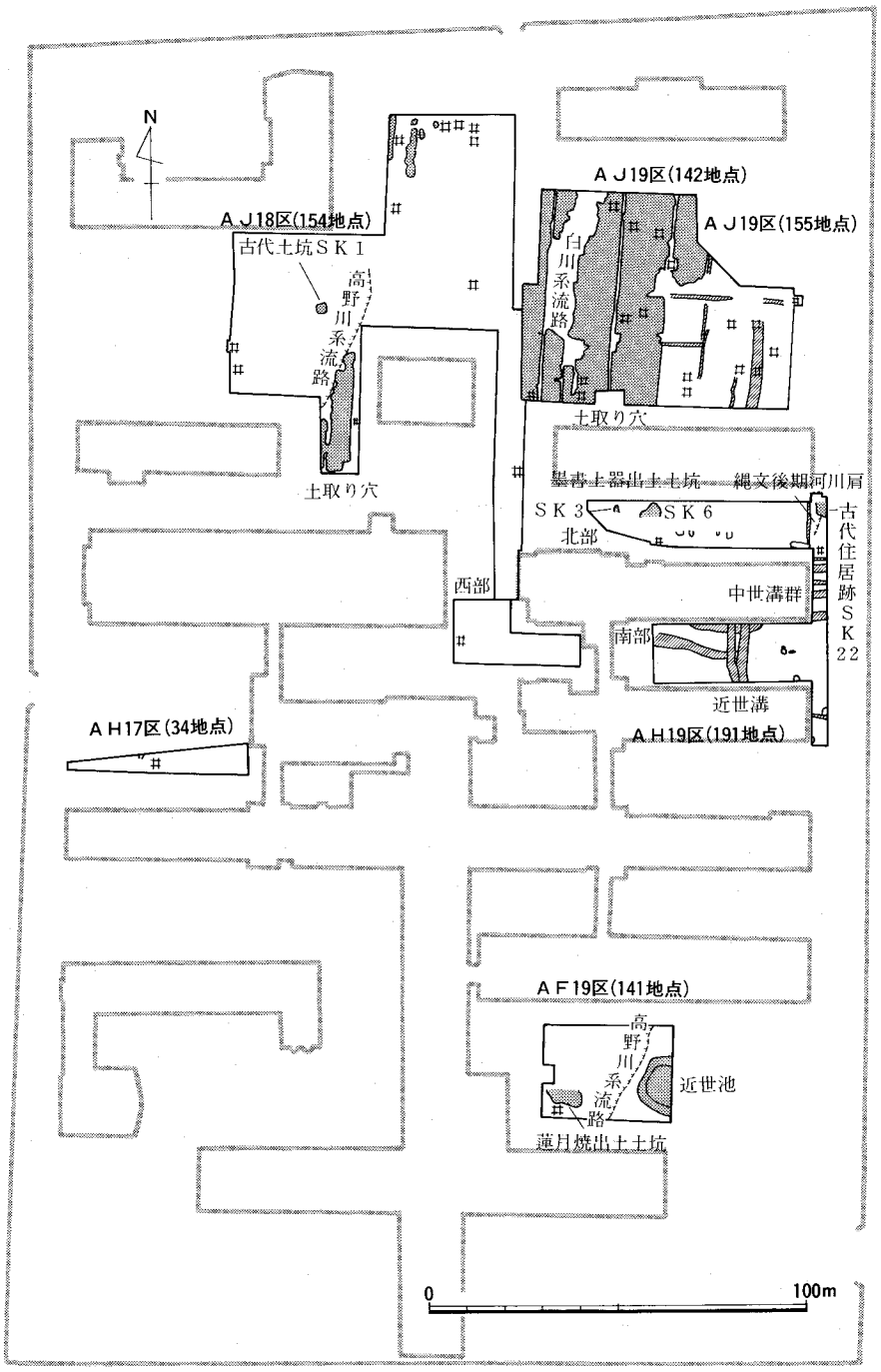


図6　病院東構内の遺構　縮尺 1/2000

2　層位と遺構

本調査区の現地表は，北東端で標高約 50.5 m，南西端で 49.0 m を示し，北東から南西にかけて緩やかに傾斜する。この一帯は，旧白川の形成した扇状地の扇端部にあたり，鴨川にもほど近い。基本的層序は，上から表土，茶褐色土，黒色土，暗灰色粘質土，白色砂礫，黄灰色シルトとなっている。本調査区一帯は近代に大規模な削平をうけており，近世の遺物包含層はなかった（図 7）。

茶褐色土は中世の遺物を多量に含む層である。調査区西部では攪乱によってほとんど遺存していなかったが，北部と南部では平均して 20～30 cm の厚さを残している。中世の遺構はいずれもこの茶褐色土を埋土としている。調査区の東部北端および南部においては

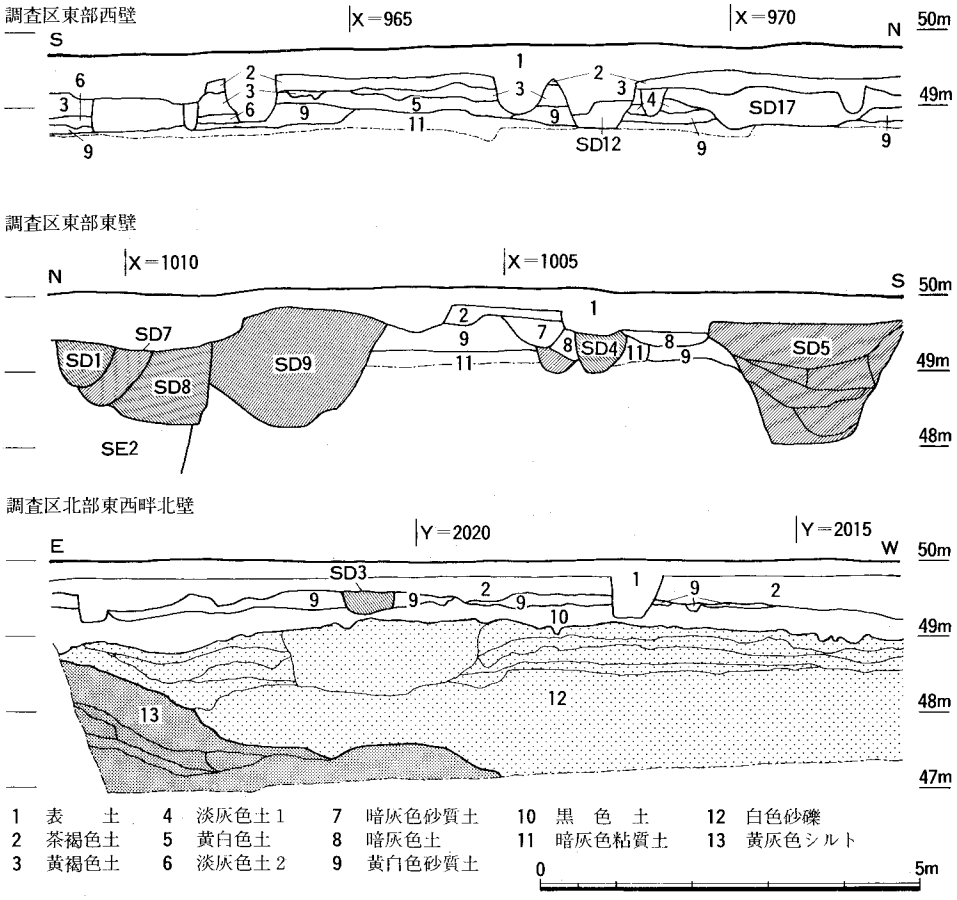


図 7　調査区の層位　縮尺 1/100

部分的に，古代の遺物を出土する砂質土層が茶褐色土の下に存在する。調査区南部ではこの砂質土を埋土とし，北東から南西方向へ向かう 2 本の流路を検出したが，いずれも古代の遺物を含む。その下の黒色土と暗灰色粘質土は共に無遺物層であり，前者はおもに調査区の北部から南部にかけて厚く堆積しており，後者は東部南端に堆積している。

黄灰色シルト，白色砂礫，赤褐色砂礫の厚い堆積は高野川系旧流路と白川系旧流路によって形成されたものであり，調査区北部でおこなった深掘りでは，流路の肩にあたる部分を検出した。白色砂礫中からは，ほとんど摩滅していない縄文土器片が整理箱に 7 箱出土している。

本調査では，古代の土坑，中世の柱穴，井戸，土坑，溝，近世の大溝，土坑を検出して

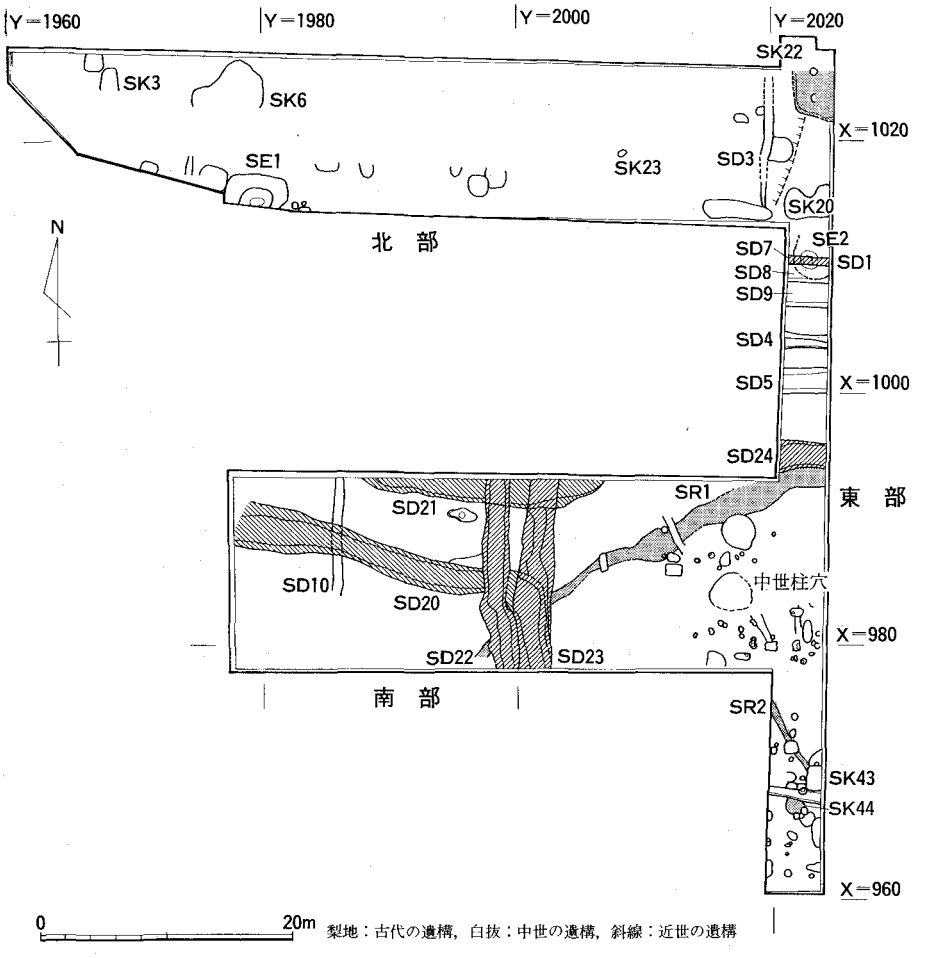


図 8　調査区検出の遺構　縮尺 1/600

いる（図版2～6，図8）。調査区東部，X＝1000～1010付近で，東西にはしる7本の溝SD1，SD4，SD5，SD7～SD9，SD24を検出した。溝SD1・SD24が近世の遺物を含むほかは，14世紀の遺物を含む。この溝の集中する部分が近世の吉田村と聖護院村の字境界と一致することから，この付近に中世以来の土地境界あるいは道路があったものと考え，白河の条坊地割の復原を試み，この溝群のうちSD5とSD9が勘解由小路末の側溝にあたる可能性を指摘した〔浜崎91〕。この溝群を境に遺構の分布状況が変化する。井戸はこの溝群より南では検出しておらず，これらの井戸は154・155地点で検出した多数の井戸と一連のものである可能性が高い。土坑も溝群の北に多く，遺物の出土量も北が圧倒的に多い。また，154・155地点では近世の大規模な土取り跡を検出したが，こうした土取りは本調査区まではおよんでおらず，近世の遺構は調査区南部で溝群を検出したにとどまった。

3　古代の遺跡

古代の遺構は，暗褐色粘質土層あるいはその下の黄白色砂層を掘り込んで形成されている。遺構は調査区東半部に分布するが，その数は少ない。出土遺物は8世紀代のものと10世紀のものがみられるが，空白期間が多く，継続的な生活の跡は認められない（図版3，図8・9）。

土坑SK22　東部北端で検出した方形の土坑で，南北，東西の検出長は，ともに約3m，検出面からの深さは0.3mを測る（図版3-1）。輪郭は一部明確でないが，隅丸方形を呈することや，発掘区の東壁脇で検出した焼土塊，柱穴などから竪穴住居の可能性が強いものと考える。なお，同時期の方形の竪穴住居は約700m東北の本部構内75地点でも確認されている〔五十川81 pp. 29-31〕。

Ⅱ1・Ⅱ2は土師器杯。Ⅱ3は土師器甕。体部外面は刷毛目調整，内面と口縁部外面は撫でによって調整している。Ⅱ4は口縁が体部より開く器形で鍋に近い。口縁端部は上方につまみあげる。内面下部に当て具痕が残り，胴部下半は叩いた後で刷毛目調整を加えて仕上げたものとみられる。Ⅱ5・Ⅱ8は須恵器杯身。底部に篦切り痕が残る。Ⅱ6は杯蓋。つまみはきわめて偏平で，端部の屈曲もほとんどない。Ⅱ7は鉢。下半には削り痕を残す。精良な仕上げであり，器形からみても金属器を模倣したものであろう。以上のような出土遺物からSK22は8世紀末ごろに位置づけられるだろう。

土坑SK44　調査区南部で検出した土坑である。黒色土器や土師器甕を出土した。黒色土器はいずれも内面のみ炭素を吸着させたA類である。Ⅱ9は黒色土器の椀の底部。内

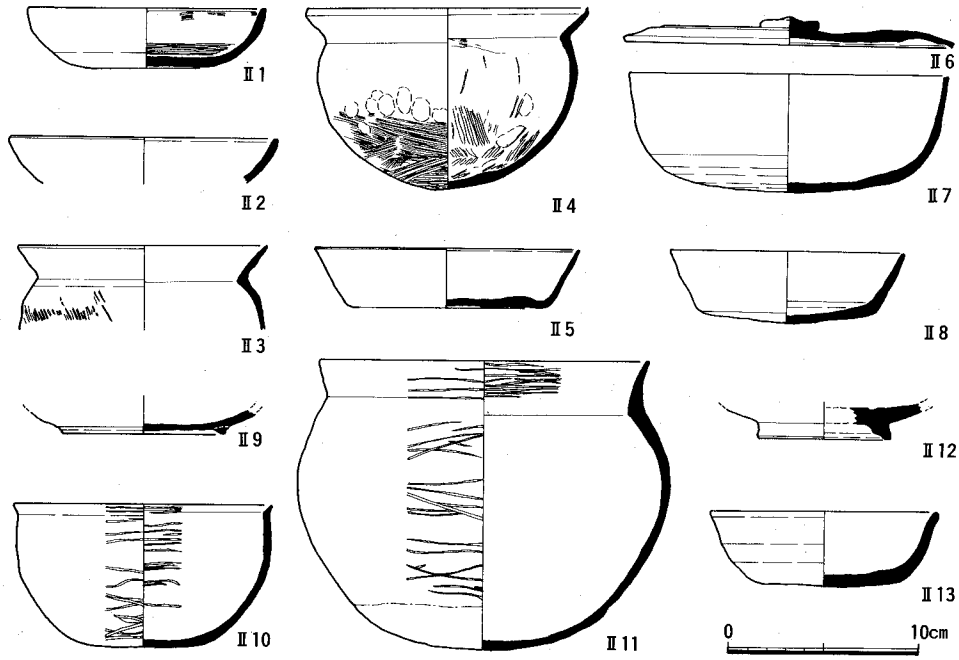


図9　SK22出土遺物（Ⅱ1～Ⅱ4土師器，Ⅱ5～Ⅱ8須恵器），SK44出土遺物（Ⅱ9～Ⅱ11黒色土器），SR1出土遺物（Ⅱ12緑釉陶器），SR2出土遺物（Ⅱ13須恵器）

面には篦磨きを密にし，外面は撫で調整を施す。Ⅱ10は黒色土器鉢。口縁部は短く外方に折り返し，底部は平底に近い器形である。内外面とも篦磨きを施す。Ⅱ11は黒色土器の甕。頸部の屈曲がゆるくなだらかな肩をもつ。内外面ともに篦磨きを施したようである。底部下半は，明確な境界を挟んで赤変し器面が荒れており，竈などの施設に置いて火にかけたことがうかがわれる。この他に，端部を内側に折り返す土師器甕や鍔が大きく張り出す大和型の土釜が出土している。10世紀ごろの資料であろう。

流路SR1　調査区南部で検出した自然流路である。幅は約1.5～2.2m，検出面からの深さは0.2～0.8mを測る不整形な流路である。北東から南西方向に流れる。Ⅱ12は流路内から出土した緑釉陶器。高台に段をもつ近江産の緑釉陶器椀と考えられる。釉は濃緑色で見込みに圏線がめぐる。見込みと底部にトチンの痕が残る。10世紀後半に位置づけられる。

流路SR2　調査区南部で検出した北西から南東に向かう自然流路である。暗灰色粘質土層を掘り込み，幅は約0.4m，深さは検出面から約0.1mを測る。Ⅱ13の須恵器杯身が出土した。

4　中世の遺跡

中世の遺構は時期によって位置が異なる。調査区北部に位置する12世紀の土坑をはじめとして，13世紀の遺構は北部から東部南半に，14世紀の遺構は南東部に多く，15世紀の遺構は南部，というようにほぼ時期を降るにしたがって，南部に分布の中心が移動する。ただし調査区南部西半ではほとんど遺構はみられない。近世以降に削平された可能性もあるが，本来少なかったものと思われ，遺構の中心は北部と東部にあったものとみてよい。以下，遺構の時期の順にほぼ従って，各遺構の特徴と出土遺物について記述する。

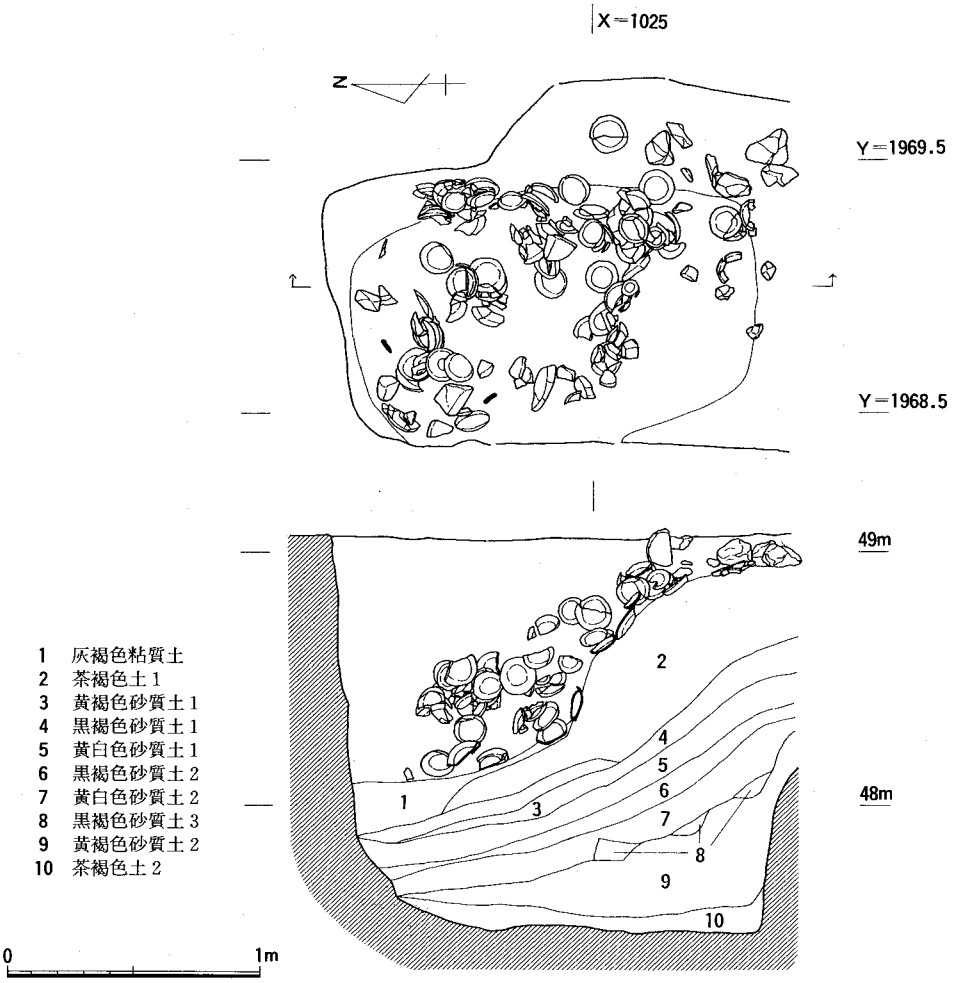


図10　土坑SK3遺物出土状況　縮尺 1/30

土坑SK3（図版3-2，図10・11）　調査区北部，X＝1025，Y＝1969付近に位置する。管路によって南半を破壊されているが，長さは2.1 m前後でおさまるものと推測され，幅は北辺で1.1 m，南辺で1.4 mを測る。検出面からの深さは1.55 mを測る。

埋土の状況は上半と下半の2つに分けられる。下半は土坑を堀りくぼめたときの掘削土の埋め戻し土と考えられ，茶褐色土，黄褐色・黒褐色・黄白色砂質土，灰褐色粘質土が南側から北側へ向かって傾斜をつくりながら埋積している。遺物下半の埋土からは遺物はほとんど出土していない。上半には茶褐色土が埋積し80個体をこえる土師器皿，少量の瓦器椀，灰釉系陶器の小片を包含していた。土師器皿は上面から出土した一部を除いて，ほとんど完形に復原できるものであった。遺物は下半の埋積によって形成された北に下がる斜面に沿って，南側から置かれた，あるいは廃棄されたような状況で出土した。土坑の壁や斜面にもたれかかるように，ほぼ垂直に立っていた土師器も多量にみとめられた。出土遺物のほとんどが完形の土師器皿で占められることや，埋積の状況，底部外面に人面を墨書した土師器皿が出土していることから，祭祀にかかわる遺構である可能性が高い。

Ⅱ14～Ⅱ23はSK3出土遺物。Ⅱ14～Ⅱ19は口径14.1～14.6 cmを測る大型の土師器皿AⅠ類，Ⅱ14は2段撫で素縁手法C_3類，Ⅱ15～Ⅱ17は2段撫でつまみ手法C_4類，Ⅱ18・Ⅱ19は2段撫で面取り手法C_5類。Ⅱ16は底部に焼成後の穿孔を有する。Ⅱ16の口縁部内外面には煤が付着しており，底部の小孔に燈芯を通し，燈明皿として使用したものであろう。Ⅱ20・Ⅱ21は，口径10 cmを測る土師器皿AⅡ類。このほかに土師器皿の中に

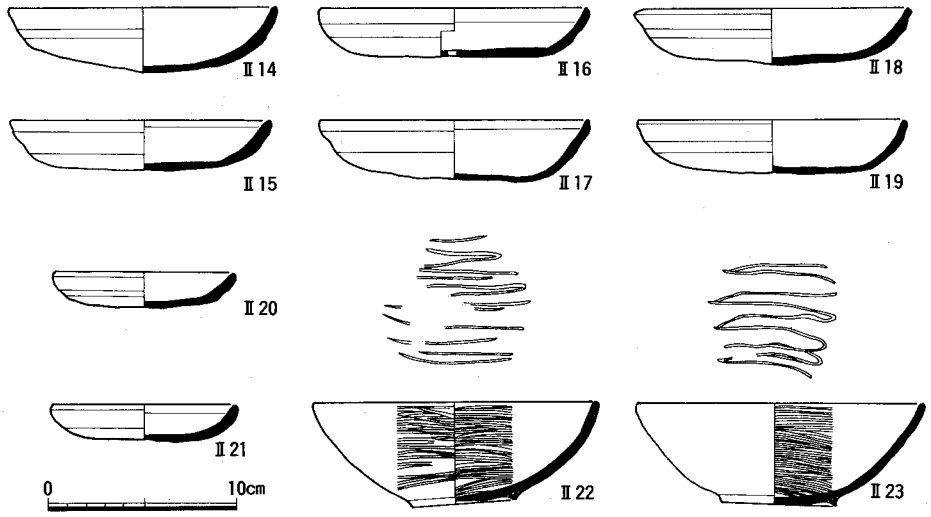


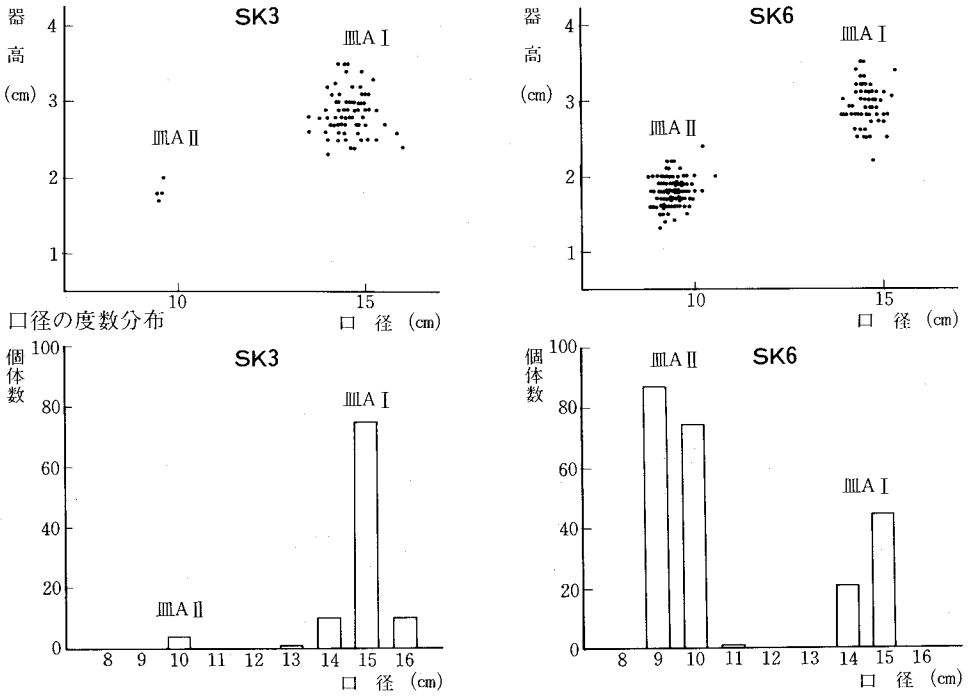
図11　SK3出土遺物（Ⅱ14～Ⅱ21土師器，Ⅱ22・Ⅱ23瓦器）

表1　SK3・SK6出土土師器

規格別口縁部形態の比率

SK3		SK6					
ⅢAⅡ 個体数4.8個体	ⅢAⅠ 75.7個体	ⅢAⅡ 個体数 162個体				ⅢAⅠ 66個体			
C_3 類 55.1%	C_3 類 32.6%	C_2 類	0.0%	D_2 類	0.0%	C_2 類	1.2%	D_2 類	2.4%
		C_3 類	30.3%	D_3 類	3.0%	C_3 類	28.4%	D_3 類	14.9%
C_4 類 5.2%	C_4 類 62.4%	C_4 類	51.6%	D_4 類	4.5%	C_4 類	37.7%	D_4 類	7.4%
		C_5 類	9.1%	D_5 類	0.0%	C_5 類	6.8%	D_5 類	0.6%
C_5 類 39.7%	C_5 類 5.0%	D_1 類	1.5%			D_1 類	0.6%		
合 計 100.0%	合 計 100.0%	合 計			100.0%	合 計			100.0%

法 量 分 布



人面墨書土器が1点（Ⅱ55）含まれているが，これについてはSK6出土の墨書土器とまとめて記述する。Ⅱ22・Ⅱ23は瓦器椀。両例とも見込みには，蛇行する暗文が施されている。これらの遺物は12世紀中葉のものであろう。

SK3から出土した土師器皿を口縁部計測法で総計すると80.5個体となった。そのほとんどは口径 15 cm にピークをもつ大型のⅢAⅠ類で，全体の94.0%を占める。口縁部手法

は2段撫でつまみ手法 C_4 類のものと2段撫で素縁手法 C_3 類が多く，2段撫で面取り手法 C_5 類のものは少ない。

土坑SK6（図版4-1，図12～14）　東西方向の長さ6.0m，南北方向の検出長5.0m，検出面からの深さ1.0mを測る大規模な土坑である。南半分は攪乱を受け，南北長は不明である。埋土の状況から西半部と東半部の2回にわたって埋積したことがわかる。東半部の埋土は多量の土師器皿と瓦器椀などを含む。西半部の埋土は土師器皿や中世陶器甕の破片を含むが，遺物の全体量は東半部より少ない。東半部の埋土は東から西に向かって流れ込むように埋積し，遺物の多い層と，少ない層が互層をなして堆積している。

ここから整理箱69箱の遺物が出土した。大半は土師器皿であったが，そのほかに，土師器高杯と蓋が1個体分，土師器鉢が3個体分，瓦器椀が17個体以上，瓦器皿が2個体，灰釉系陶器椀・鉢・壺が1個体以上，大型の陶器甕が1個体分，軒丸瓦1個体，平瓦などが

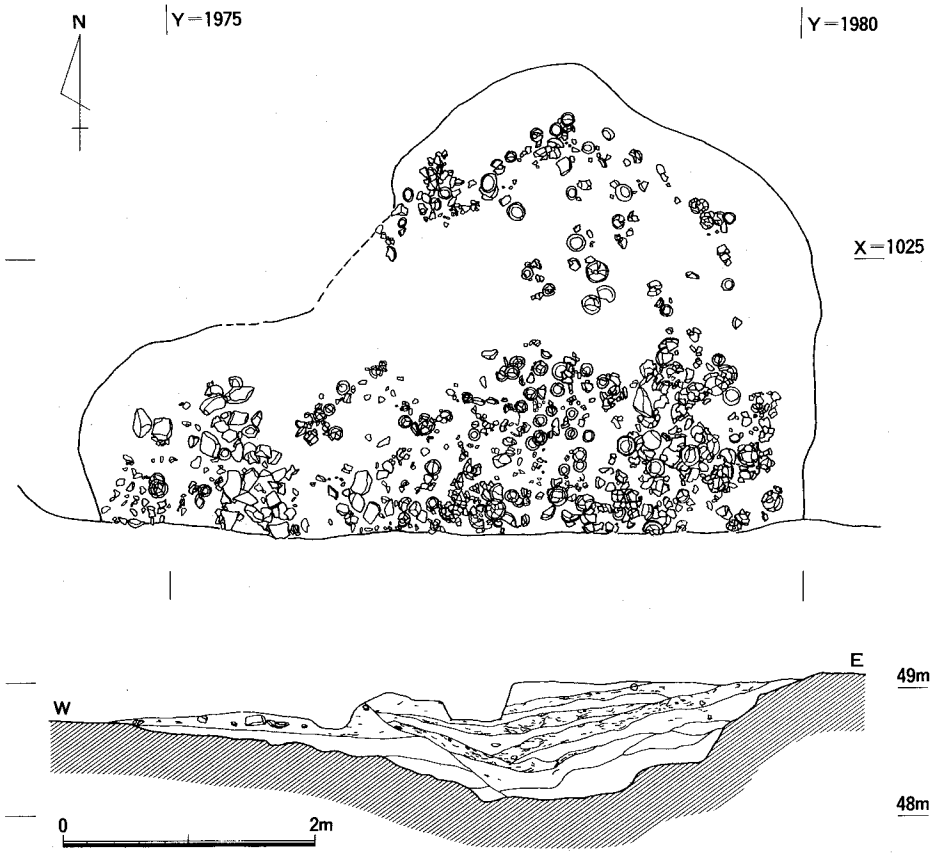


図12　土抗SK6遺物出土状況　縮尺1/60

含まれていた。

土師器皿については，完形品のみを取り上げて法量を計測した。SK3と同様，表1のように，口径15 cmを中心とする大型の皿AⅠ類（Ⅱ24～Ⅱ31）と，口径9 cmを中心とする小型の皿AⅡ類（Ⅱ32～Ⅱ36）とにはっきり二分される。口縁部形態は，皿AⅠ類では2段撫で素縁手法C_3類（Ⅱ24・Ⅱ25），2段撫でつまみ手法C_4類（Ⅱ26・Ⅱ27），1段撫で素縁手法D_3類（Ⅱ30）が多く，2段撫で面取り手法C_5類（Ⅱ28・Ⅱ29），1段撫で面取り手法D_4類などをふくむ。皿AⅡ類でも，C_3類（Ⅱ32・Ⅱ33），C_4類（Ⅱ34）を中心とし，D_4類（Ⅱ36），D_3類（Ⅱ35）などをふくむ。こうした土師器皿の中には墨書をもつもの，底部に穿孔をもつもの，口縁部付近に煤が付着したものがある。また赤と青の顔料が付着したものなどがあり，分析の結果，赤から鉄分と水銀が，青からは亜鉛が検出されている。[2]

Ⅱ37は土師器の蓋である。まったく同様の形態のものが，本部構内AW27区〔五十川ほか92〕，鳥羽離宮跡〔京都市埋文研86 p. 84〕から出土しており，「度嶂散」，「白散」といった薬の名称が墨書されていた。薬壺の蓋とみてよいだろう。Ⅱ38は平底の底部で口が大きく開く，他にあまり例をみない器形の土師器鉢である。ロクロ成形であり，底部には回転糸切り痕を残す。同様に回転糸切り痕を残す平底の底部破片を2点検出している。これらの資料は12世紀後葉ごろのものと考えられる。

Ⅱ39～Ⅱ48は瓦器。皿2個体，小型の椀2個体のほか，椀が比較的まとまって出土した。皿（Ⅱ39）は口縁部外面を強く撫でて外反させた形態で，見込みとともに口縁部内面にも粗い暗文を施すようである。小型の椀にはやや器高が低いもの（Ⅱ40）と深手のもの（Ⅱ41）がある。前者は内面に比較的密に螺旋状の暗文を施し，後者も，観察しにくいが内面に暗文を施すものと思われる。椀の高台はいずれも断面三角形状の小さなもので，内面には密に，外面には粗く螺旋状の暗文を施す。口縁部内側に小さな段をもつもの（Ⅱ42～Ⅱ44・Ⅱ46・Ⅱ47）と，もたないもの（Ⅱ45・Ⅱ48）がある。見込みの暗文にも渦巻を連ねるもの（Ⅱ42～Ⅱ45），格子状のもの（Ⅱ46），蛇行するもの（Ⅱ47・Ⅱ48）の区別がある。

Ⅱ49は青白磁の合子蓋。天井部に花文を施す。Ⅱ50・Ⅱ51は白磁の皿。内面に一条の圏線を施す。外面下半は露胎である。Ⅱ52・Ⅱ53は灰釉系陶器。Ⅱ52は椀。Ⅱ53は壺の底部であろう。Ⅱ54はSK6の最底部から出土した軒丸瓦である。本例は比較的残りがよく，他に瓦類がほとんど出土していない。あるいは，井戸の廃絶などにあたって意図的に軒丸

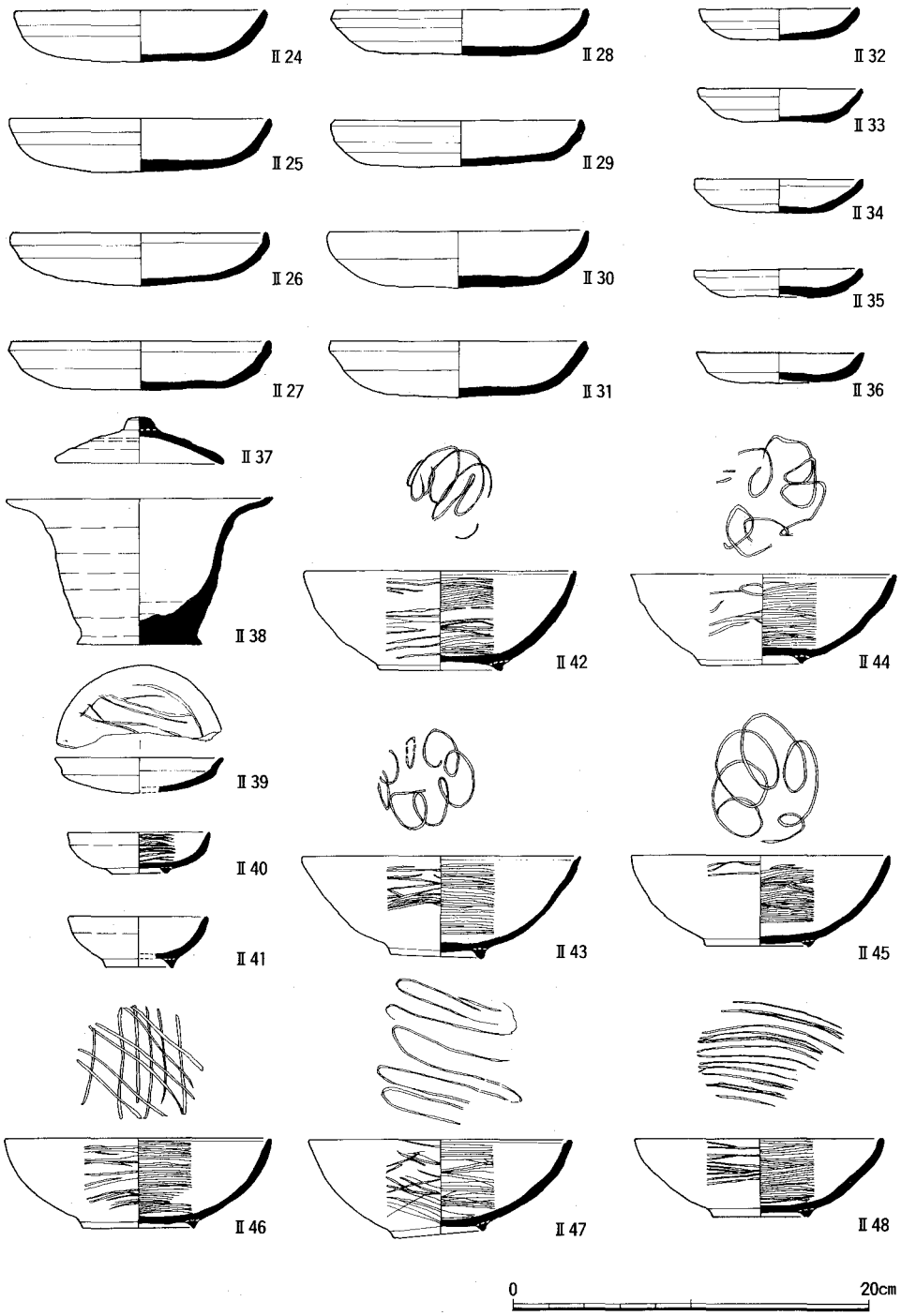


図13　SK6出土遺物(1)（Ⅱ24～Ⅱ38土師器，Ⅱ39～Ⅱ48瓦器）

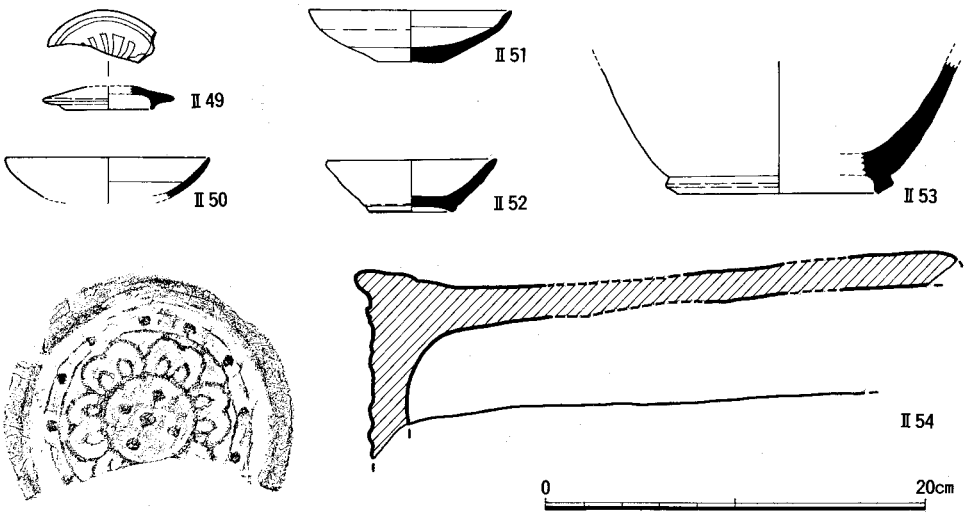


図14　SK6出土遺物(2)（Ⅱ49青白磁，Ⅱ50・Ⅱ51白磁，Ⅱ52・Ⅱ53灰釉系陶器，Ⅱ54軒丸瓦）

瓦を埋めた可能性もある。

SK3・SK6出土の墨書土器（図15）　SK3とSK6出土の土師器皿には墨書の施されたものや，使用の痕をとどめるものなどいくつかの興味深い資料が含まれていた。ここで両遺構出土の墨書土器について，まとめて報告する。

Ⅱ55はSK3から出土した人面墨書土器である。大型の皿AⅠの底部に，墨が薄れてやや判別しにくい部分もあるが，眉，目，団子状にふくらんだ鼻，口髭，歯をむきだしにした口などが表現されている。顔の左側にも何か墨書されているが判別できない。

Ⅱ56～Ⅱ58はSK6出土の墨書土器である。いずれも小型の皿AⅡ類に施されている。Ⅱ56は内外面に蓮華文を描く。外面の蓮華文では交互に表された花弁の間を櫛歯文で埋めている。内面の中央には蓮子がみられ，中房のまわりには蕊（しべ）の表現もある。花弁の大きさ，位置は不均等で，内面と外面の花弁の位置も対応しない。Ⅱ57は底部外面に人面を描く。髪と太い眉，目を描き，女性を表現したものと思われる。Ⅱ58は皿。3～5回ほど筆の方向を変え，5本の線を描く。SK6からはこのほかに墨書の認められる小さな破片が2点出土している。

土坑SK23（図16）　調査区北部で検出した土坑。四方を管路によって削られており，正確な輪郭は不明である。Ⅱ59・Ⅱ60は2段撫でつまみ上げ手法 C_4 類の土師器皿。Ⅱ61は2段撫で素縁手法 C_3 類の土師器小皿。Ⅱ62は土師器受け皿である。Ⅱ63は土師器鍋。口縁が水平に近く外方へ屈曲し端部に面をもつ。外面には指おさえの痕跡が残り，内面は刷毛

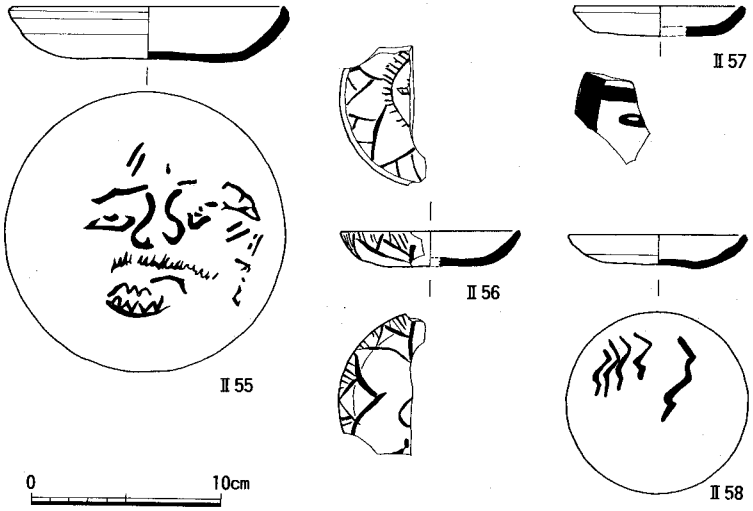


図15　墨書土器（Ⅱ55 SK3，Ⅱ56～Ⅱ58 SK6）

目調整である。胴部外面に屈曲部近くまで煤が付着する。12世紀末ごろに位置づけられる。

土坑SK43（図16）　調査区南部で検出した方形の土坑である。木炭などともに土師器，灰釉系陶器，青磁などが出土した。Ⅱ64・Ⅱ65はともに1段撫で面取り手法 D_5 類の土師器皿。Ⅱ66は灰釉系陶器のすり鉢。内面は使用によって激しくすり減っている。Ⅱ67は青磁皿。底部に花文状の墨書がある。一部に煤が付着している。Ⅱ68・Ⅱ69は瓦器鍋。口縁部の屈曲が明瞭でほぼまっすぐ立ち上がる。内面はきわめて細かい刷毛目調整で，Ⅱ69では板状工具の静止痕を観察できる。13世紀の前半ごろに位置づけられるだろう。

土坑SK20（図16）　調査区北東部で検出した土坑。上層には炭化物の層があり，その下から人頭大の石がまとまって出土した。Ⅱ70・Ⅱ71は1段撫で素縁手法 E_1 類の皿。Ⅱ72は1段撫で素縁手法の小型の皿。Ⅱ73は1段撫で素縁手法 E_1 類の椀。Ⅱ74は瓦器鍋。Ⅱ68・Ⅱ69と同様の形態であるが，口縁部の屈曲があまくなっている。

土坑SK11（図16）　井戸SE1とほぼ重なって位置し，SE1によって切られていた浅い土坑。Ⅱ75は1段撫で素縁手法 E_1 類の土師器皿。Ⅱ76は1段撫で素縁手法 E_1 類の土師器椀。Ⅱ77は瓦器羽釜。内面に刷毛目痕を残す。Ⅱ78は瓦器鍋。端部の屈曲が矮小化している。以上に挙げた土坑は鍋，羽釜，すり鉢など調理具を出土し，また炭や石などをともなうものもある。いずれも日常生活に強く関連した遺構と考えられよう。

調査区東部の北半では，SD5をはじめとして，東西方向に延びる中世，近世の溝が集中する（図8）。

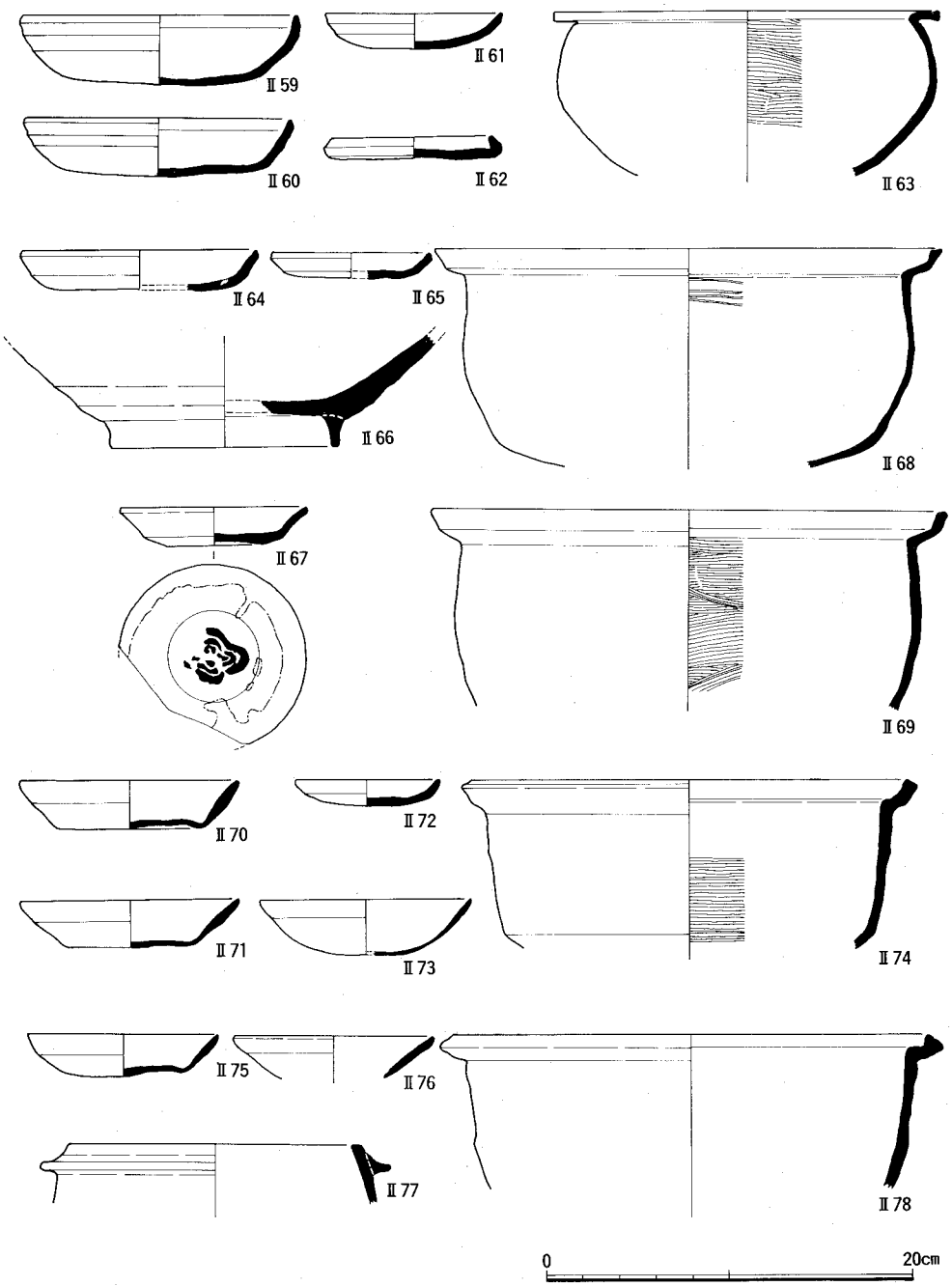


図16 SK23 出土遺物（Ⅱ59～Ⅱ63土師器，SK43 出土遺物（Ⅱ64・Ⅱ65土師器，Ⅱ66灰釉系陶器，Ⅱ67青磁，Ⅱ68・Ⅱ69瓦器），SK20 出土遺物（Ⅱ70～Ⅱ73土師器，Ⅱ74瓦器），SK11 出土遺物（Ⅱ75・Ⅱ76土師器，Ⅱ77・Ⅱ78瓦器）

溝SD3（図17）　調査区の北部東端で，南北方向の溝SD3を検出した。溝SD3は幅0.7 m，検出面からの深さ0.3 m，検出長約10.0 mを測る溝で，12～14世紀の遺物を含む。Ⅱ79・Ⅱ80は1段撫で手法D_5類の土師器皿で，Ⅱ79は口径9.6 cm，Ⅱ80は9.2 cmを測る。Ⅱ81は青白磁合子の身で，外面下半部は釉を施さず，外底部は釉を掻き取る。Ⅱ82は龍泉窯系青磁椀で，青緑色の釉調を示し，外面体部には鎬蓮弁文を施す。

溝SD7（図17）　幅約1.1 m，検出面からの深さ0.8 mのV字型の溝で，近世の溝SD1に切られる。Ⅱ83は灰釉系陶器の鉢で，口縁部が外反する。

溝SD9（図17）　検出幅2.3 m，深さ1.6 mの溝で，ほぼ同規模の溝SD8，SD7に切られる。Ⅱ84は白磁の椀で，Ⅱ84は口縁部を外反させ，Ⅱ86は見込みに櫛目文を施す青磁椀。Ⅱ85は瓦器のミニチュアの羽釜。

溝SD5（図17）　幅2.7 m，検出面からの深さ1.6 m，断面が逆台形を呈する溝である。Ⅱ87は体部が直線的に外へ開く陶器のすり鉢で，やや深めである。口縁端部は丸く，内面の口縁部直下にはかすかな稜をなす段がある。内面には5条1単位の櫛状工具を用いて，おろし目を放射状に施す。よく使い込まれており，下半部のおろし目は摩耗し，器壁もやや薄くなっている。底部は平底であるが，調整は粗雑である。

これらの溝は近世の遺物を含むSD1まで，ほぼ同じ位置に重なるうえ，旧吉田村と旧聖護院村との字境界がこの辺りを通ることから，中世から続く土地境界あるいは道路の側溝に関連する遺構と考えられる。

この境界に沿うような位置で，SE1とSE2の2基の井戸を検出した。

井戸SE1（図17・18）　一辺が約2.6 mの隅丸方形の掘形の中に板で井戸枠を作るもので，検出面からの深さ2.6 m，井筒の一辺は0.7 mであった。Ⅱ88は2段撫で手法C_4類の土師器皿で，口径は11.7 cmを測る。12世紀の遺物である。

井戸SE2（図17・18）　一辺約3.1 mの隅丸方形の掘形の中に人頭大の石を積む。石組みの井筒の内径は1.4 mを測る。石組みの井筒の下部に方形の木枠を組み，さらにその下に曲物と思われる水溜めをもつ井戸で，検出面からの深さは4.0 mを測る。Ⅱ89・Ⅱ90は1段撫で素縁手法E_1類の土師器皿。Ⅱ91・Ⅱ92は灰白色を呈する土師器の椀で，口縁部の形態はⅡ91は1段撫で素縁手法E_1類，Ⅱ92は1段撫で素縁手法E_2類の凹底小椀。Ⅱ93は常滑産の甕の口縁部。Ⅱ94は鋳鉄製の犁先[3]。中央部に目釘穴を開けている。Ⅱ95は白磁の四耳壺。高台部は露胎であり，高台上部をしぼり込むように削る。14世紀の資料と考えている。

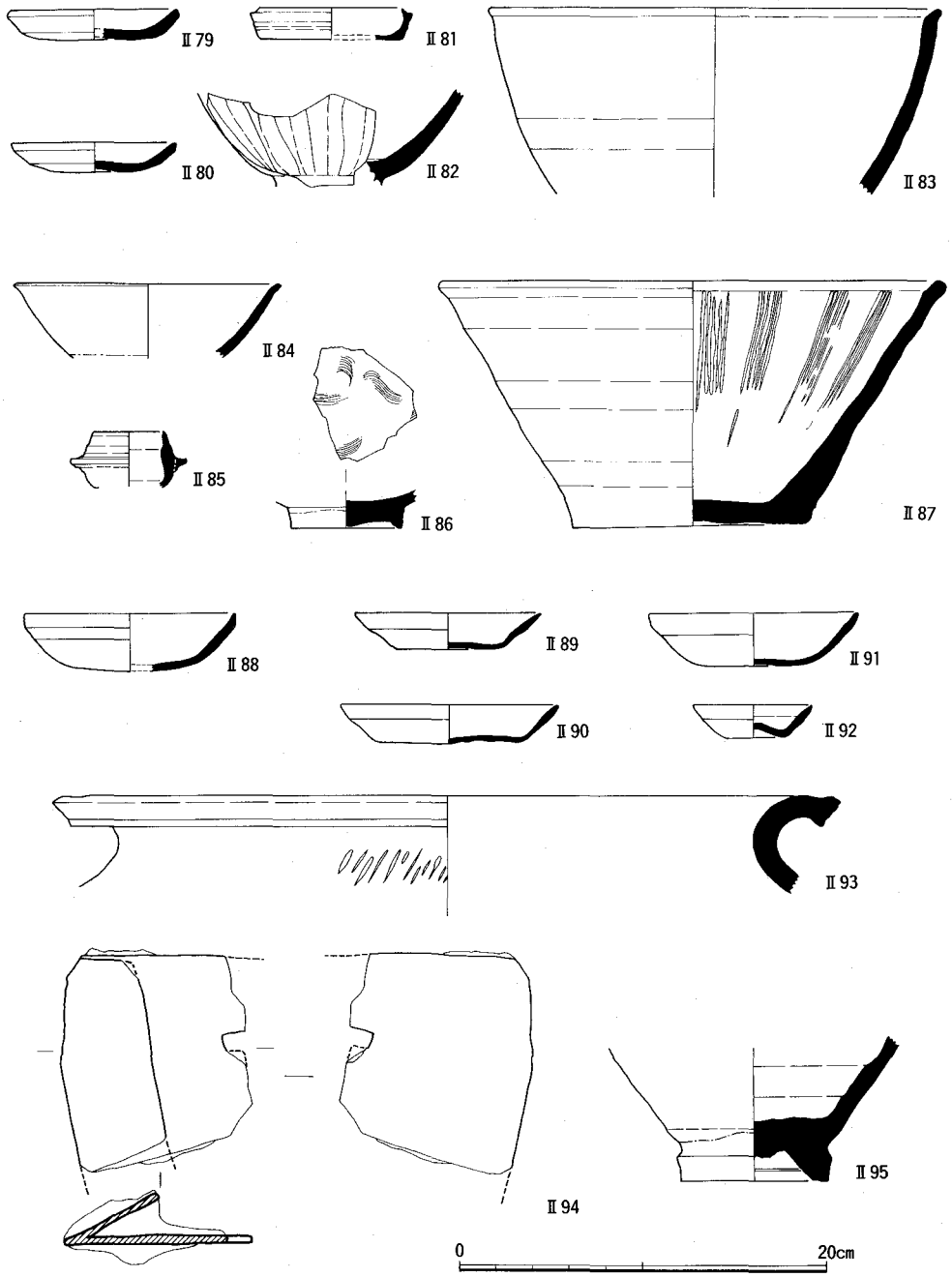


図17 SD3出土遺物（Ⅱ79・Ⅱ80土師器，Ⅱ81青白磁，Ⅱ82青磁），SD7出土遺物（Ⅱ83灰釉系陶器），SD9出土遺物（Ⅱ84白磁，Ⅱ85瓦器，Ⅱ86青磁），SD5出土遺物（Ⅱ87陶器），SE1出土遺物（Ⅱ88土師器），SE2出土遺物（Ⅱ89～Ⅱ92土師器，Ⅱ93陶器，Ⅱ94鉄製犁先，Ⅱ95白磁）

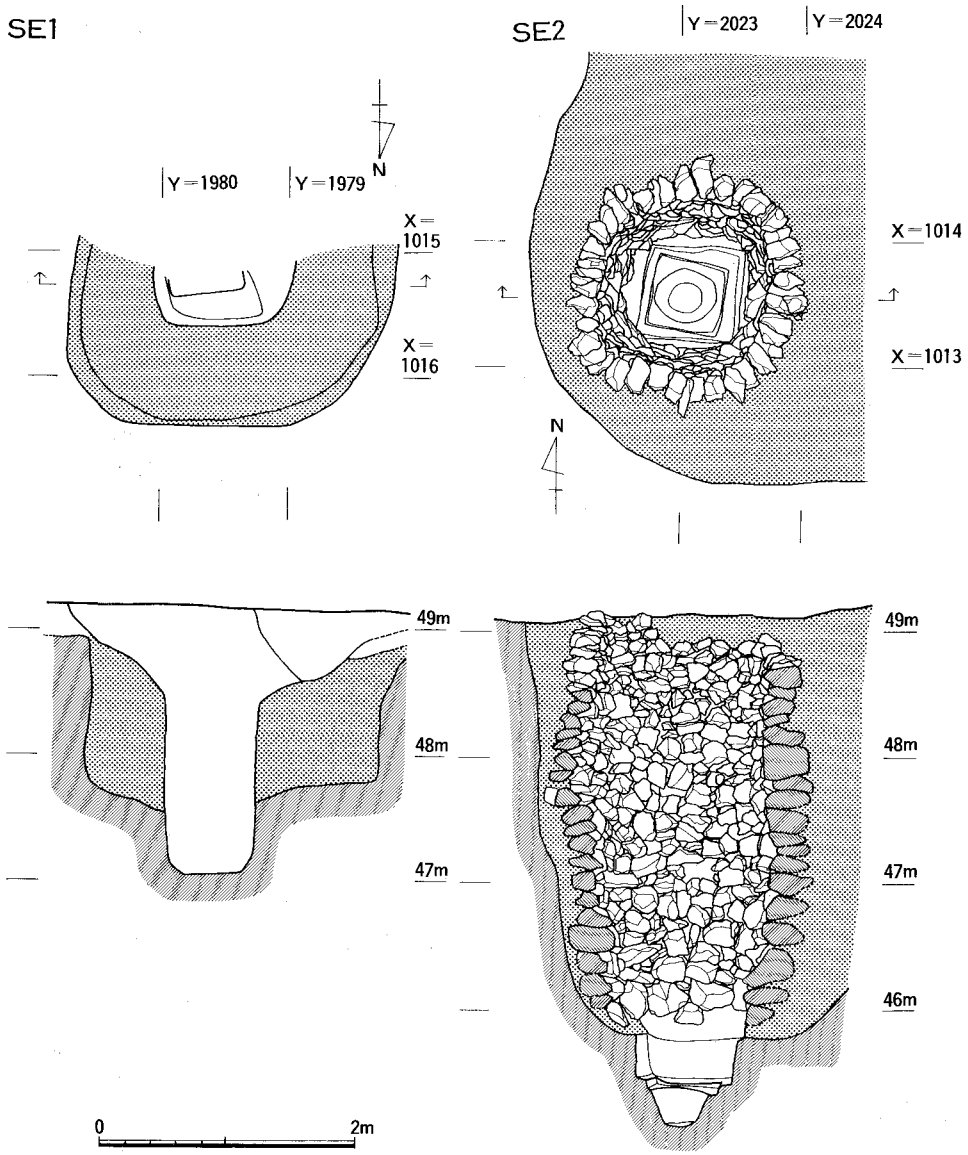


図18　井戸SE1・SE2　縮尺 1/60

調査区の東部南半から南部において検出した柱穴群は，直径 20～30 cm のもので，根石を据えているものが目立つ。建物跡を復原できるような並びを見いだすことはできなかったが，この南において多数検出された土坑群とあわせて，中世の，中規模程度の建造物の存在を考えることができるだろう。

5　近世の遺跡

幅の広い溝SD20～SD24と幅の狭い溝のSD1以外，近世の遺構に目立ったものはない。SD20は検出幅2m，深さ0.8m，断面逆台形を呈するもので，東西軸に対してやや斜めに25m以上はしり，東端のY＝2000付近で南に曲がる。SD21は溝の南半分しか検出していないが，検出長19m，幅1.8m以上，深さ0.3mを測る。SD22，SD23は相接し，ほぼ南北方向に走る溝で，SD22は検出長14.5m，幅1.3m，深さ1.3mで断面逆台形。SD23は検出長14.5m，幅2.8m，深さ0.4mで底は不定形。SD24はほぼ東西方向に走り，検出長3m，幅2m，深さ1.0mを測る。

SD20，SD21は，近世の出土遺物が少なく，埋積の際に混入した中世の遺物が多く含まれる。これに対し，両者を切って掘られたSD22，SD23は，瓦や近世の陶磁器を大量に含む。これらは江戸時代後期のものと考えられるが，当時のこの地には，現在東大路通りの東側に移転している，照臨院なる寺院のあったことがわかっており，この溝や瓦もそれに関連するものの可能性がある。

溝SD22出土遺物（図19・20）　Ⅱ96～Ⅱ117は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ96は大型の皿で口径16.2cm，Ⅱ97～Ⅱ103は中型の皿で口径11.5～12.0cm，Ⅱ104～Ⅱ117は小型の皿で口径9.5～10.5cmを測る。大型，中型の皿は器壁が厚く，直線的に立ち上がるものが多く，橙褐色の色調を呈するのに対して，小型の皿は器壁が薄く，外反気味に立ち上げ，端部を内側へつまむものが多く，にぶい黄褐色の色調を呈する。Ⅱ103・Ⅱ108・Ⅱ110・Ⅱ112・Ⅱ117の口縁部には煤の跡がつく。Ⅱ118～Ⅱ127は見込みに圏線を有しない土師器の小皿。法量の上で，口径8.0～9.2cmを測る大型の皿（Ⅱ118・Ⅱ119）と，口径5.0～7.0cmを測る小型の皿（Ⅱ120～Ⅱ127）の2種類に細分できる。大型の皿は量的に少ない。Ⅱ119・Ⅱ125の口縁部に，煤の跡が認められる。Ⅱ128は土師器壺。ロクロ成形を施した扁平な壺である。Ⅱ129・Ⅱ130は焼塩壺の蓋。上面は平坦であり，内面には型作りであることを示す布目痕が残る。Ⅱ131～Ⅱ133は焼塩壺の身。Ⅱ131は，外面に刻印をもつが器面の剝離がひどく判読できない。Ⅱ129・Ⅱ130は渡辺誠のいう蓋B類に，Ⅱ131は身のA類，Ⅱ132はF類，Ⅱ133はG類にあたる。Ⅱ128もL類のミニチュアの可能性がある〔渡辺誠85〕。Ⅱ134は，土師器鉢。口縁部に紐掛け孔をもつ把手がつく。Ⅱ135，Ⅱ136は土師器炮烙。Ⅱ136は外型を用いて底部を作り，回転撫でで仕上げる。鍔はなく口縁部は内傾する。難波洋三のいうF類にあたる〔難波89〕。Ⅱ137は陶器椀。見込み

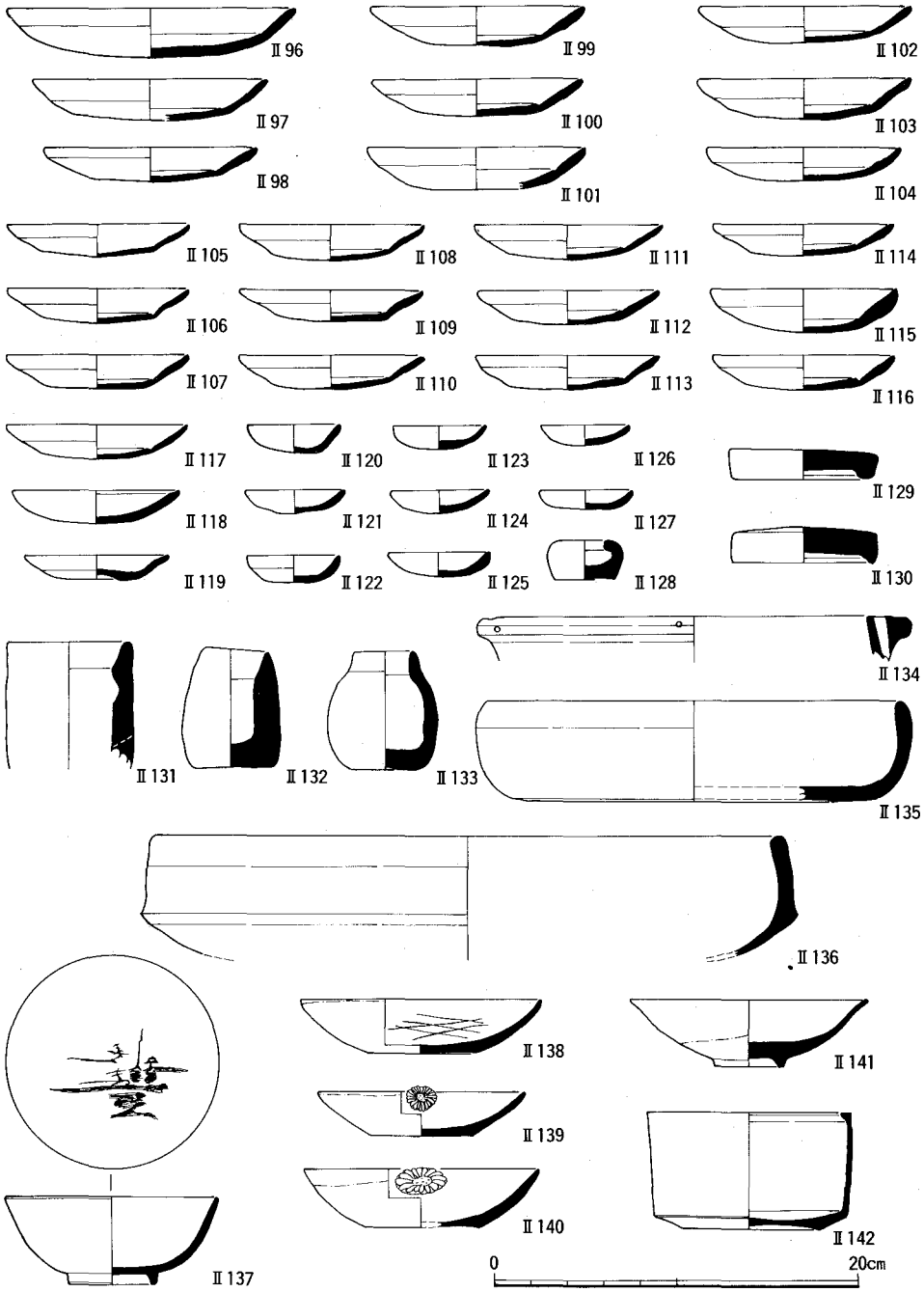


図19　SD22出土遺物（Ⅱ96～Ⅱ136土師器，Ⅱ137～Ⅱ142陶器）

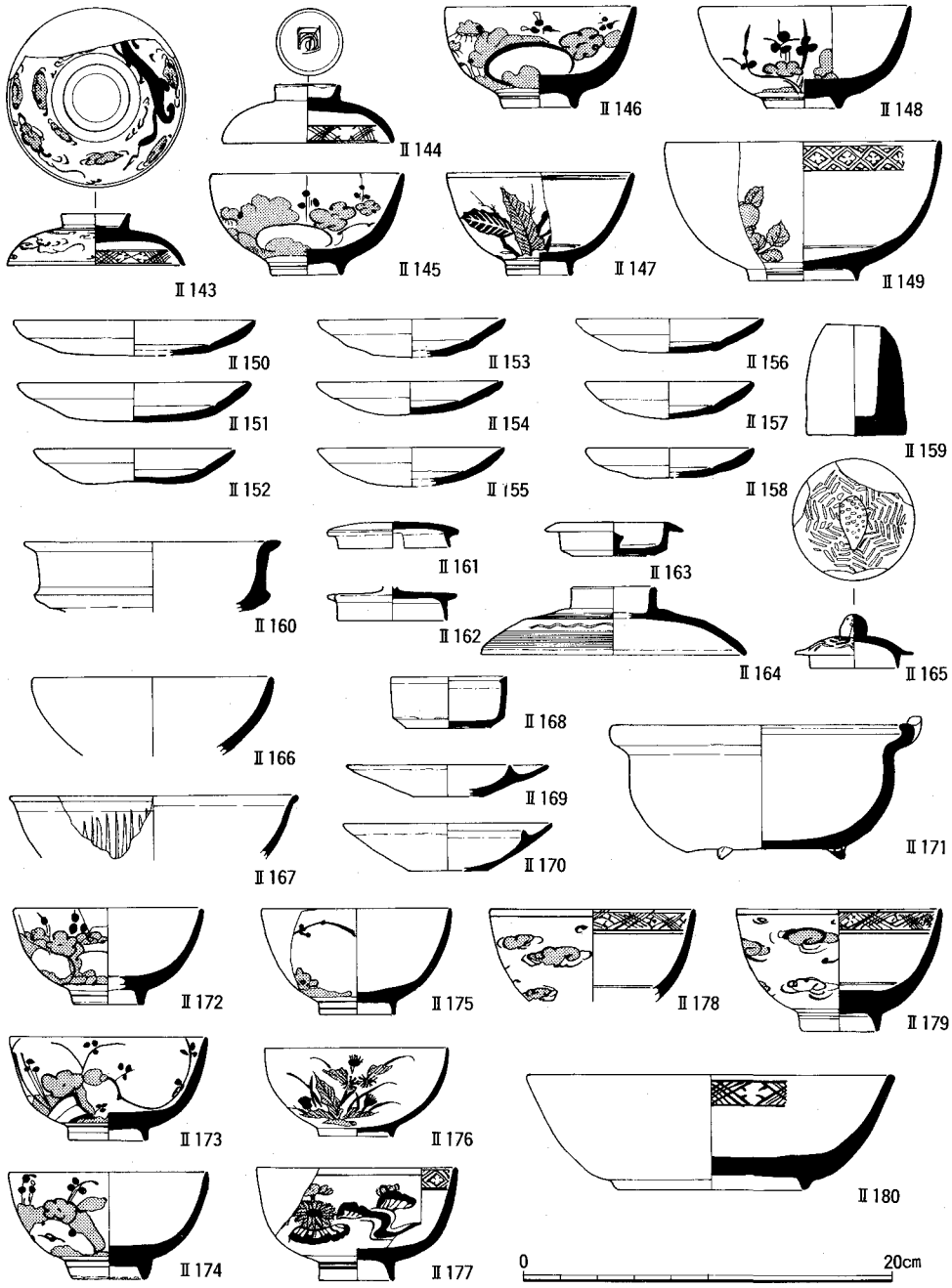


図20　SD22出土遺物（Ⅱ143～Ⅱ149染付），SD23出土遺物（Ⅱ150～Ⅱ160土師器，Ⅱ161～Ⅱ171陶器，Ⅱ172～Ⅱ180染付）

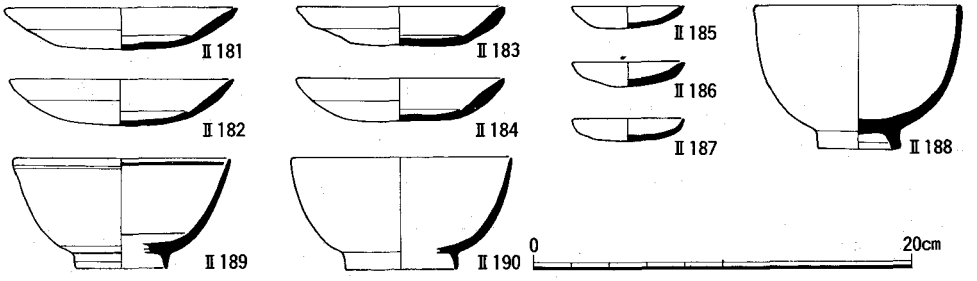


図21　SD24出土遺物（Ⅱ181～Ⅱ187土師器，Ⅱ188陶器，Ⅱ189染付，Ⅱ190磁器）

に山水楼閣文を鉄絵で描く。Ⅱ138～Ⅱ140は陶器燈明皿。Ⅱ139・Ⅱ140は口縁内面に型抜きによる菊花をはりつける。Ⅱ141は陶器皿。Ⅱ142は陶器向付。Ⅱ143・Ⅱ144は染付椀の蓋。Ⅱ144は外面に青磁釉を施し，高台内部に「渦福」銘をもつ。Ⅱ145～Ⅱ149は染付椀。Ⅱ145～Ⅱ147は，くらわんか椀で樹花文を描く。

溝SD23出土遺物（図20）　Ⅱ150～Ⅱ158は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ150・Ⅱ151は口径13.0 cm，12.7 cmを測る中型の土師器皿。Ⅱ152～Ⅱ158は9.5～11.0 cmを測る小型の土師器皿。Ⅱ159は焼塩壺の身。Ⅱ160は土師器炮烙。Ⅱ161～Ⅱ165は陶器蓋。Ⅱ161は黄緑色の釉を施す蓋。つまみは無く，「合口」に切り込みがあることから，油差しのような液体容器の蓋であったと考えられる。Ⅱ162・Ⅱ163・Ⅱ165は土瓶の蓋で，Ⅱ162・Ⅱ165は山蓋，Ⅱ163は平蓋である。Ⅱ163は花を，Ⅱ165は松笠を模したものをつまみとする。Ⅱ164は土鍋の蓋で，口縁部を除く内外面に灰緑色の釉を施す。Ⅱ166は陶器椀。黄色釉で内外面に文様を描く。Ⅱ167は陶器鉢。口縁部は外反し，外面には縦位の沈線を施す。Ⅱ168は陶器向付。Ⅱ169・Ⅱ170は陶器燈明受皿。Ⅱ171は陶器鍋。外底部を除く内外面に鉄釉を施す。Ⅱ172～Ⅱ179は染付椀。Ⅱ172～Ⅱ175は，くらわんか椀で，樹花文を描く。Ⅱ176・Ⅱ177は草花文，Ⅱ178・Ⅱ179は雲形文を描いている。Ⅱ180は染付皿。

溝SD24出土遺物（図21）　Ⅱ181～Ⅱ184は見込みに圏線をもつ土師器皿。Ⅱ181・Ⅱ182は口径12.4 cm，12.0 cmを測る中型の土師器皿。Ⅱ183・Ⅱ184は11.0 cm，10.8 cmを測る小型の土師器皿。Ⅱ185～Ⅱ187は見込みに圏線をもたない土師器小皿。口径はいずれも6.0 cm。Ⅱ188は陶器椀。全体に褐色の釉を施す。Ⅱ189は染付椀。文様は内外の単純な横線のみである。Ⅱ190は磁器椀。まったく絵付けを施していない。

SD22～SD24より出土した土師器皿は共通する特徴やよく似た規格をもっており，また，SD22とSD23では酷似する染付椀が出土していることから，これらの溝はほぼ同じ時期に埋積したと考えてよいであろう。その時期は土師器，染付の年代観より18世紀後半

の年代を与えられよう。

6　小　　結

本調査区一帯は，高野川系と白川系の河川堆積物によって土地形成がおこなわれている。今回の調査では，堆積物の中から縄文中・後期の土器が出土し，奈良時代の遺構がその上に営まれていたことから，その河川による堆積の時期を，その間に限定することができた。また，高野川系，白川系の両河川の岸辺にも縄文人の活動が及んでいたことが判明した。

奈良時代の遺構では，住居跡の可能性をもつ土坑SK22のほかに，調査区の南端でもこの時期の遺物包含層を検出している。北側に隣接する154地点の土坑SK51からは，7世紀後半から8世紀初めにかけての土師器甕，須恵器杯，鉄滓が出土しており，この地一帯で平安京造営以前に生活が営まれていたことをうかがわせる〔五十川ほか89〕。また，本部構内では，8世紀の竪穴住居跡を検出しており，この時期の竪穴住居跡の存在の可能性を裏付ける〔五十川81〕。

多量の土器が出土した12世紀の土坑SK3・SK6に関連すると思われるものに福勝院がある。福勝院は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子が仁平元（1151）年に創建した寺で，九躰阿弥陀堂，寝殿，三重塔，護摩堂などのあったことが知られている〔杉山62，川上77〕。その位置は本調査区の北東に位置する京都大学楽友会館から近衛中学校のあたりに比定されているが，正確な位置は不明である。SK3・SK6から出土した土器には，燈明皿として使用された痕跡を残すもの，人面墨書土器（Ⅱ55），密教法具のひとつ六器の台皿を模したと思われる墨書土器（Ⅱ56）がある。本調査区の北約150 mの169地点で出土した六器の鋳型とともに，福勝院での祭祀にかかわった遺物の可能性がある〔浜崎90〕。

調査区の東端，X＝1000～1010のあたりに中世から近世にかけて集中していた溝のうち，SD5やSD9を詳細に検討した結果，この2本の溝が白河の条坊地割の小路のひとつである勘解由小路末の側溝である可能性が高くなり，教養部構内111地点で検出した溝SD10〔五十川・飛野84〕や，本部構内75地点で検出した溝SD3〔五十川81〕とともに，白河街区の条坊地割の復原をおこなった〔浜崎91〕。

SD4～SD9などの溝が集中する部分を境にして，本調査区の北部にはSK6を中心とする土坑群が多数掘られ，南部においては掘立柱の建物が作られていた。本調査区一帯では，井戸，祭祀などに用いられた土坑が集中する北部と，井戸をほとんど検出していない

南部とに明確に分けられることは，ここに街区を区画する小路のあった事を裏付ける。

また，近世の溝SD1は，聖護院村と吉田村の字境と一致する。天明6（1786）年に作製された中井家本洛中洛外図（京都大学附属図書館蔵）にはこの位置を通る道が描かれており，SD1はこの道の側溝とも考えられる。154・155地点で検出した大規模な土取り穴も，SD1より南にはなく，調査区南部で検出したSD22・SD23も北に延びていない。近世においてもSD1あたりに境界があったものと考えられる。

近世の溝SD20～SD23に関連するものとして照臨院があげられる。照臨院は享保5（1720）年，霊潭が荒廃していた洛東千日庵に移り住み，聖臨庵（照臨院）と改称し，浄土宗最初の律院として開創したことに始まる。近代初頭の境内は，東西21間5尺，南北18間4尺を測り，本堂，客間，隠寮，物入，鎮守堂などの建物があった[(4)]。この照臨院は，明治30年の京都帝国大学附属病院の開設にともない，本調査区の東，東大路を隔てた地に移転した。その旧地は現在地より半町ばかり西といわれ[(5)]，本調査区一帯に当たる。大量の近世瓦と近世陶磁器が出土したSD20～SD23は，照臨院にかかわるものである可能性がある。なお，前述の中井家本洛中洛外図では，SD22，SD23が聖護院村の西端にあたる可能性もあるが，さらに西へ延びるSD20，SD21については不明である。

〔注〕

(1) こうした様子は，富岡鉄斎が安政～文久年間にかけての聖護院村を晩年に回顧して描いた「聖護院村略図」に詳しい〔浜崎・宮本87 p. 54〕。
(2) 分析にあたっては本学環境保全センターの御協力をいただいた。
(3) 京都芸術短期大学の内田俊秀氏に分析を依頼した。そして，金属顕微鏡を用いてサビ中の金属組織を観察した結果，鋳造組織が確認された。
(4) 『社寺録愛宕郡之部』，『寺院明細帳』京都府立総合資料館蔵
(5) 碓井小三郎「聖護院村」『京都坊目誌』1915年